

道徳教育推進教師による授業サポートのあり方

～各教師の道徳授業力を高めるために～

The Way of Moral Teaching Support by Moral Education Facilitator

大藏純子*

OKURA Junko

柳沼良太**

YAGINUMA Ryota

*下羽栗小学校

**岐阜大学教育学研究科

キーワード：道徳教育推進教師，道徳教育推進アンケート，道徳指導チェックシート，授業サポート，アクション・リサーチ，問題解決型の道徳授業

はじめに

筆者は先の論文で道徳教育推進教師の役割と実践について検討した⁽¹⁾。ここでは、『小学校学習指導要領解説 道徳編』に即して，道徳教育推進教師の役割を①道徳教育の指導計画の作成，②道徳教育の推進と充実，③道徳授業の充実，④道徳用教材の整備，⑤道徳教育の情報提供，⑥家庭や地域社会との連携，⑦道徳教育の研修，⑧道徳教育の評価の8つに分類した⁽²⁾。その上で，こうした役割について，①⑧は「指導計画の作成と評価」，②⑤⑥は「道徳教育の推進と充実」，③④⑦は「道徳授業の充実」に大別した。こうした役割をもつ道徳教育推進教師の実態を明らかにするために，永田繁雄と島恒生の『道徳教育推進教師の役割と実際』⁽³⁾を参照して独自にアンケートを作成し，岐阜県羽島郡の小中学校（小学校6校，中学校2校）の道徳教育推進教師を対象にアンケート調査を行った。その結果は，①「道徳教育の指導計画の作成」…4点満点中3.5点，②「道徳教育の推進と充実」…2.9点，③「道徳授業の充実」…2.8点，④「道徳用教材の整備」…2.1点，⑤「道徳教育の情報提供」…3.3点，⑥「家庭や地域社会との連携」…2.7点，⑦「道徳教育の研修」…2.6点，⑧「道徳教育の評価」…2.6点であった。達成度が高かった①②⑤の項目からは，各学校において指導計画が整備され，道徳教育の情報は各教師に提供され，指導計画に基づいて道徳教育が推進されていることが分かる。しかし，これらは従前の道徳主任が行ってきた役割と重なるため，道徳教育推進教師に求められているファシリテーターとしての役割というよりは，チーフの役割に留まっている。また，④⑦の道徳授業に関連する項目の実践が弱いことも明らかになった。以上のような結果からは，道徳用教材の整備や活用の推進が進まず，道徳授業の充実ができていないことが指摘できる。さらに，羽島郡内の道徳教育推進校であっても③「道徳授業の充実」における，道徳の授業力の向上については，まだ課題があるとされている。道徳授業の充実のためには，道徳教育推進教師による細やかな指導や配慮が求められることが明らかになった。

以上のようなアンケート調査とその考察をふまえて，本稿では，道徳教育推進の成否を決める道徳授業の充実に重点を置き，道徳教育推進教師が行う授業サポート等の実践を具体的に取り上げ，効果的なサポートや校内研修のあり方について検討する。特に，筆者(大藏)が道徳教育推進教師として実際にアクション・リサーチを行った実践事例について考察することにしたい。

本稿の内容構成は，以下のとおりである。第1節では道徳教育推進教師に求められる役割や授業サポート内容について明らかにする。第2節では基本的な技法を習得したい教師へのサポートのあり方，第3節では道徳的実践力を高める発展的授業のあり方について具体的に検討する。そして，道徳教育推進の成否を決める鍵とも言われる道徳授業の充実に向けて，効果的な授業サポートのあり方につい

て明らかにしていく。

第1節 道徳教育推進教師による授業サポート

(1) 道徳教育推進教師に求められる役割

道徳教育推進校では、道徳教育推進教師や研究推進委員長を中心に学校全体で道徳教育が力強く実践される。優れた実践事例は研究紀要などの出版物として数多く残されている。しかし、各教師のキャリアや能力は様々であるため、良いと思われる指導法の押し付けだけでは、道徳授業を充実させることはできない。道徳授業は道徳的価値を伝達するのではなく、子どもの道徳的実践力を養う時間であるため、教師の授業技術のみを研究するのではなく、学級経営や日常生活における指導を充実させる必要がある。つまり、道徳授業の学びと道徳教育における実践が相互に影響し合う中で、子どもの道徳的実践力を育成していくのである。

したがって道徳教育推進教師には、自校の道徳教育の課題を捉え進むべき方向を定め推進していくファシリテーターの役割と、各教師のニーズに応え道徳授業の充実を支えるサポーターとしての役割が求められる。

堀公俊著『問題解決ファシリテーター』によると、ファシリテーターとは、「①組織のパワーを最大限に引き出し、高度な問題解決に導く②意見ではなくプロセスをコントロールすることによって、組織の意思決定の質を上げる③メンバーに学習を促し、組織の成長を促していく」⁽⁴⁾とある。このことから、ファシリテーターはインストラクターでも、権力を振りかざすリーダーでもないことが分かる。まさに組織の中に存在し、組織を導いていくのである。

右図のように、横軸を個人的または社会的、縦軸を学習的または創造的の4象限で分類したところ、ファシリテーションの応用分野は「①コーチング、②開発実践、③基本研修、④自己研修」の4つに整理された。



【図 4つのファシリテーション】

先述のとおり、授業サポートは2つに大別できるが、基本的な技法を習得したいと望む教師に対しては、コーチング(①)の手法を用いた授業サポートが効果的と考えられる。また、道徳的実践力を高めたいと願う教師に発展的授業を提案することで、開発実践(②)が推進する。

さらに、授業サポートを個別の実践に留めず全体に広める基本研修(③)を行うことで、それが各教師の自己研修(④)に活かされ、道徳授業力の向上に繋がっていくと考えた。

(2) 「道徳指導チェックシート」の開発と実施

道徳教育推進教師は、各教師の道徳授業をサポートし、アドバイスし、コーチすることが求められる。学校には初任者から中堅教師やベテラン教師まで経験や力量の違う様々な教師が存在し、それぞれ異なる課題意識をもっている。それぞれの教師に合わせた適切な授業サポートを行うことができれば、授業力を向上させていくこと可能であると考えられる。

授業サポートのメリットは、一つ目に教師のキャリア形成や自己課題に応じたアドバイスを行うことで、授業力や意欲を高められることである。また二つ目として、授業者に道徳授業の特質や楽しさを経験させることもできる。

授業サポートをする前提として、各教師の道徳指導力の現状と課題を把握する必要がある。そのため、筆者(大藏)は「道徳指導チェックシート」を独自に開発した⁽⁵⁾。この道徳指導チェックシートは、小学校教諭として15年間にわたって取り組んだ道徳実践の中で、授業力向上に繋がると思われる

項目についてまとめたものである。

①「事前の教材研究」、②「道徳の時間における教師の役割」、③「道徳の時間における板書」、④「事後指導」、⑤「教育活動全体で行う道徳教育」の5つの視点から成り、各教師が自己評価するものとする。このチェックシートを基に、道徳教育推進教師は授業者の自己課題を的確に掴み支援に活かすことができる。また、授業者自身も長期的な見通しをもって授業力向上に自主的に取り組むことができると思う。

このチェックシートを下羽栗小学校の担任教師14名に実施したところ、①「事前の教材研究」…4点満点中3.0点、②「道徳の時間における教師の役割」…2.8点、③「道徳の時間の板書」…3.1点、④「事後指導」…2.5点、⑤「教育活動全体で行う道徳教育」…3.1点となった。その中でも2-12「家庭や地域と連携した授業」は2.2点、2-13「多様な学習展開」は2.4点、4-3「道徳の学びを通信等で伝える」は1.9点と低く評価されていた。以上のことから、授業展開に工夫が足りないため授業に充実感がないこと、また、家庭や地域と連携した授業実践に至っていないことが、学校全体に共通した課題として捉えられた。また、各教師の自己課題も明らかになった。

このチェックシートの結果を基に、授業サポートの重点内容を以下のように設定した。基本的な技法を習得したいと望む教師に対しては、導入や展開の工夫・発問の仕方・役割演技の方法・構造的板書や深めの発問などについて支援する。道徳的实践力を高める授業を求める教師に対しては、多様な授業展開・魅力的な教材開発などについて支援する。そして、自己の生き方を考える展開を工夫することで実効性に繋げていく。

道徳教育推進教師が授業サポートをする場合、ただ既存の指導法を上から押し付けるのではなく、先述のチェックシートで明らかになった各教師の課題意識に寄り添いながら、必要な道徳指導の知識や技術をコーチングする必要がある。その際、各教師の授業の悩みや苦手意識をカウンセリングしながら、励まし動機づけすることも重要であると思う。

以下に筆者（大蔵）が2012年10月から2013年6月にかけて下羽栗小学校で行った事例研究について考察する。

第2節 基本的な技法を習得したい教師へのサポート

2012年10月から2013年3月の間に、教員6年目女性A教諭（1年生担任）、初任男性B教諭（2年生担任）、新採2年目女性C教諭（5年生担任）の3名それぞれに授業サポートを各2回実施した。また、2013年度に新採2年目（5年生担任）となったB教諭には、授業サポートを継続して行っている。

道徳指導チェックシートと面談によって決定した自己課題は、A教諭が「役割演技の工夫と交流への活かし方」、B教諭が「展開時における発問の仕方」、C教諭が「中心発問の設定の仕方と板書のあり方」となった。基本的な技法を習得したい若手教師たちであっても、それぞれのキャリアや担当学年によって自己課題は様々であることが分かる。ここで道徳教育推進教師は、道徳授業の進め方について相談に乗るサポーターあるいはアドバイザーとしての役割を果たすことになる。次に、これらの授業サポートの事例研究について報告する。

(1) A教諭への授業サポート

A教諭は6年目の教師で、2012年度に初めて1年生を担当した。1年生は生活指導と学業指導を一から行わなければならない、教師には指導力が求められる。A教諭は学級の児童と信頼関係は築いていたが、叱らないで学習に集中させることができず、教科経営においては苦勞していた。特に、道徳の時間に役割演技や動作化をすると、子どもが劇化の楽しさに浸ってしまい、その後の話し合いに繋がらないと悩んでいた。

そこで1回目の授業サポートでは、筆者(大蔵)が動作化を取り入れた授業を実践し、A教諭には「教師の発問の投げかけ方と子どもの発言の取り上げ方、またどのように話し合いに繋げていくか」について詳しく観察するよう助言した。A教諭の省察シートには、「何のために変身(動作化)するのかを子どもに理解させて学習活動を仕組むことが大切だと分かった。また、その時の子どものつぶやきを教師が拾って広めることで、子どもたちは意欲的に主人公の心情を話していた。そうすることで、教師もその後の話し合いを深める組み立てを考えることができることが分かった」と記されていた。

A教諭は授業サポートによって、役割演技や動作化の技法を身につけることができた。その結果、自分の指導に自信をもち、意欲的に道徳授業を実践することができるようになった。A教諭は、自分自身と筆者(大蔵)の授業実践の違いはどこかについて詳しく観察することで、自己課題に対する解決策を自分で見つけた。このように道徳教育推進教師は、若手に授業技術を押し付けるのではなく、道徳授業の意義と方法を丁寧に教え、実際に模範を示し若手に実践を推奨することによって授業力を高めることができるのである。

(2) B教諭への授業サポート

B教諭は初任教师であるため、授業実践において習得すべき内容は多い。しかし着実に授業力を高めていくためには、課題を明確にして授業に臨む必要がある。自己課題である「教師の発問の投げかけ方と子どもの発言の取り上げ方」について掴んでもらうため、1回目の授業サポートでは、B教諭に筆者(大蔵)の行う授業の記録を詳細に取ってもらった。

授業後の省察シートには、「子どもの反応から、適切に補助発問を投げかけていくためには、事前の教材研究の大切さが改めて分かった。事前に挿し絵や資料文の言葉についても吟味し、本時では何を考えさせたいかを明確にして授業に臨むことが大切だ」と記されていた。B教諭が考察したことは他にもあったが、次の課題は授業実践の中核となる発問に絞った。そして、展開での話し合いがスムーズに進むよう、十分に教材研究をして授業に臨んだ。本時はB教諭がT1として授業を進め、筆者(大蔵)がT2として授業をサポートし、必要な時に補助発問や価値付け、そして板書等を行った。そうすることで、授業の停滞を防ぎ、話し合いを深めることができた。また、B教諭に道徳授業の楽しさや充実感を体験してもらうこともできた。

しかし、初任教諭に対し僅か2回の授業サポートでは授業力向上に限界がある。授業サポートによって、授業者の苦手意識を減少させることには一定の成果はあるが、それ以後も授業者側の継続的な努力と、道徳教育推進教師側の定期的で的確な支援の継続が必要である。2013年度B教諭は、「展開時における発問の仕方」に加えて、話し合いを深めるための「構造的な板書」にも取り組むこととした。「待合室でであった少女」を実践した時の省察シートには、「昨年度から取り組んでいる授業の組み立てや発問などの基本的なことに対しては、自信をもって授業に臨めるようになった。課題は、児童から多様な考えが出た時に板書に整理して記述することができないことである。今後は、どの話し合いに重点を置くのか(中心発問)をよく吟味して授業実践をしたい」と書かれていた。筆者(大蔵)はT2としてB教諭の授業をサポートしながら、B教諭が事前に指導略案や板書計画を立てることで、本時においてスムーズに発問を投げかけることができたことや発言を端的に板書し構造的な板書作りができたこと、そして板書を手掛かりに話し合いが活発になったことなど、授業力が確実に向上している具体的な姿を見ることができた。

(3) C教諭への授業サポート

2012年度C教諭は、初めて5学年を担当した。昨年度低学年を担当した時には無かった新たな悩みを抱えているとのことだった。時間内に展開前段の交流が終わらず、自己の生き方を見つめる時間が取れない、しかも解決方法は見つけられないままということだった。

C教諭は「授業実践の前に、授業の組み立て方を教えてほしいのですが…」と、自分のニーズを率直に筆者（大蔵）に伝えてくれた。そこで1回目の授業サポートは、放課後の時間を利用して事前の教材研究を行った。筆者がC教諭の相談にのる形で本時のねらいを明らかにし、ねらいに向かうための発問の構成について一緒に考え、発問に対する子どもの反応を予測して板書計画を立てた。C教諭は「授業が楽しみです。授業で話し合うべきことが明らかになったので自信をもって進められそうです」と話した。

本時は、B教諭がT1として授業を進め、筆者（大蔵）はT2として必要に応じて授業展開におけるサポートを行った。発問の精選を行い、授業者が展開の見通しをもつことで、時間内に深まりのある授業が展開できることをB教諭に体験してもらうことができた。

(4) 考察

基本的な技法を習得したい教師へのサポートから明らかになったことは、以下の2点である。一つ目は、発問・役割演技・板書などの基本的な技能の習得には、それらの意義を授業者にも児童にも掴めるように道徳教育推進教師が授業サポートを行うことで課題が解決され、停滞しがちな授業を活性化させることができることである。二つ目は、子どもが発言したキーワードを基に、次の発問に移ったり、本時話し合ったことをまとめたりしていく実践的な技能を示すことが可能ということである。若手教師は一つの発問から次の発問へのつながりが分断されてしまうことを課題として捉えている。中堅教師やベテラン教師が何気なくスムーズに行う児童の思考の流れを大切にしたい授業展開にも、いくつかの技術が存在するのである。T2である筆者（大蔵）が、子どもが発言したキーワードをもとめて次の発問に移ったり、本時みんなで考えたことをまとめたりしていく声かけを、実際の授業の場で提示することで、若手の授業力が向上することも明らかになった。

下羽栗小学校で実施したチェックシートの結果からも、基本的な技法を習得したいと感じている教師は多い。また年齢だけでなく道徳教育のキャリアをチェックし、道徳授業の経験が浅い教師に対しても同様のサポートを行い、各教師に道徳授業の特質や楽しさを感じられるようにしていく必要がある。また、基本的な技法の習得であっても上述した3名の教師のように自己課題はそれぞれ違うため、それに合わせたアプローチを用意することが求められる。

第3節 道徳的实践力を高める発展的授業

道徳授業は熱心に行っているものの、「子どもの心に響かない」「学習活動が画一化している」「実効性が上がらない」などの課題を感じている教師は多い。子どもたちが心待ちにする道徳授業を行うためには、道徳的实践力の向上を目指した授業開発が望まれる。具体的な内容としては、心情把握型だけでなく問題解決型やエンカウンター・ソーシャルスキルトレーニングの手法を取り入れた多様なアプローチや、自作資料や自作教材作りなどの魅力的な教材開発が考えられる。

2012年度には3つの学級で開発実践に関わる授業サポートを行った。発展的授業の経験がある授業者は少ないため、授業サポート1回目は道徳教育推進教師である筆者が提案授業（研究授業）を行い、2回目以降に担任教師が授業実践をするという形をとった。

2012年度の実践は以下のようなものである。2年生では「2わのことり」と「はしの上のおおかみ」を問題解決型の道徳授業で実践した。5年生では魅力的な教材開発として、「捨てられる命を見つめて」を実践した。6年生では、イチロー選手の卒業文集「なりたいものになるために」を、エンカウンターを取り入れたアプローチで実践した。また、岐阜県出身の偉人杉原千畝を取り上げた資料「六千人を救った愛」を問題解決型の道徳授業で実践した。

2013年度は、5年1組で「上手に気持ちを表現して、友達と良い関係を」をモラルスキルトレーニングで実践し、5年2組では同資料を問題解決型で行った。さらに、開発資料「わたしメッセージ」

を問題解決型で実践した。くりの実2組（特別支援学級情緒）において、開発資料「こんなときどうする？」を用い、ソーシャルスキルトレーニングの手法をとり入れた問題解決型道徳授業を実践した。

これらの実践はチェックシートを用いて、授業者の今までの実践を省察し、長所と短所を明らかにした上で行った授業サポートである。子どもたちが「自分だったらどのように行動するか」を真剣に考えて活発に話し合ったり、自分の生活をじっくり振り返ってワークシートを記入したりする様子から、画一化していると言われる授業展開から脱却し、実効性を高めていく方法を工夫する余地があることを提示することができた。また提案授業によって、多様なアプローチに対する授業者の不安感を低下させ、「これならできそうだ」という実践意欲を高めることもできた。

上述の9つの実践から、4つの事例研究について以下に考察する。

(1) 5年「捨てられる命を 見つめ続けて」⁶⁾ ～教材開発～

行き場のない犬や猫が保健所で止む無く命を奪われている事実や、捨てられた動物の無念さから、命の尊さや人間の義務について真剣に考えた。

中心発問である「殺処分という厳しい現実はどう立ち向かうべきか」については様々な意見が出た。「人間がペットの命を左右するのだから、飼い主の心構えを高める工夫が必要だ」「保健所の殺処分から動物の命を守るために、里親システムなどのボランティア活動を行う人たちが、自ら活動していることは素晴らしいことだ」「自分たちにもできることがある。安易な気持ちでペットを飼うのではなく、ペットの命を預かっていると考えて大切に世話をしていきたい」など、命の尊さを自分の実生活に引き寄せて活発に話し合った。

大好きだったペットの死を思い出し涙ぐむ児童もあったが、限りある命だからこそかけがえのない存在として大切にしなければならないこと、さらには命の限り精一杯生きることや周りの人を大切にすることなどについて深く考えた。本時の学習から、命は儚いからこそ尊いという認識を深めた児童が多く見られた。

(2) 6年「なりたいものになるために」⁷⁾ ～エンカウンターを取り入れた道徳授業～

「なりたいものになるために」は、イチロー選手の小学校卒業文集を資料化したものである。卒業を目前にした下羽栗小学校の6年生に、自分の人生について考えさせたいと願って本時を設定した。

感想交流の後、中心発問「イチロー選手が、自分の夢を実現できたのはなぜか」について話し合った。「野球選手になりたい」という強い願いをもっていったこと、そして夢の実現に向けて努力を欠かさなかったことが要因であることを、子どもたちは交流を通して明らかにした。

夢の実現のためには、強い願いと努力が大切だと知った児童は、この2つの視点から自分の生き方を見つめ始めた。本時はエンカウンターを取り入れたアプローチを実践することで、ぼんやりと思いついている将来のビジョンをより鮮明なものにさせることにした。そこで「自分の10年後のビジョンと、そのために努力すること」について、ワークシートに記入する活動と、少人数グループで自分の考えを伝えあう活動を位置づけた。

A子は「私の将来の夢は作家になることです。文章を書くことやお話を想像することが好きなので、作家になりたいと3年生のころから思っています。でも、作家になるための努力はしていません。でもよく考えてみると、小学校6年生のイチロー選手のように、今の私にも作家になるためにできることがあるのではないかと思います」と自分を見つめている。そして、夢の実現に向けて努力すべきことを考え始めた。A子は帰宅してから、日記ノートに自分の考えをびっしり記入した。

本時を終えた学級担任は、「通常の授業展開と違っていたため、初め子どもたちは戸惑った様子だったが、イチロー選手にも自分たちと同じ小学校時代があり苦勞を乗り越えて夢を実現させた姿から、力強く生きていくことの素晴らしさを感じていた。だから、その後のエンカウンターを真剣に行った

のだろう」と語っている。その後、担任はA子の日記を学級児童に紹介した。すると、A子のように自分の将来を見つめた日記を書いてくる児童が増えたという。この実践から、学習活動を工夫することによって、実効性に繋げることができることが明らかになった。

(3) 5年「上手に気持ちを伝えて 友達といい関係を」^⑧ ～問題解決型の道徳授業～

本時は、友達に流されて行動し後悔している主人公の様子から、後悔をしないようにするにはどうしたら良いかということを中心発問として話し合った。「よくないことに関しては、簡単にうなずかないようにしたほうがよい」、「首を縦に振ってNO!の気持ちを伝えたい」、「いけないことははっきりダメと言うべきだ」、「相手の気持ちを考え、言い方に気をつけることも大切だ」など、具体的な解決策を積極的に考えた。

その後、様々な解決策の中からどの方法が最良か、また自分ならどの方法を選択するかについて考えさせた。子どもによって選択する解決方法に違いがあった。日ごろあまり自己主張ができず、周りの人の言いなりになりがちな児童にとっては、きちんと自己主張をする大切さに気付き、自信をもって生活しようという意欲に繋げることができた。逆に、自己主張が強い児童は、なかなか自分の思い言えない友達も存在することを知り、相手の気持ちを大切にしながら自分の考えを主張する必要があることに気づくことができた。

その後、自分の選んだ解決方法を役割演技で行った。上手に気持ちを伝えるためには様々な工夫や相手への配慮が必要なことを、実感を通して考えることができた。

(4) くりの実2組「こんなときどうする？」～問題解決型の道徳授業～

くりの実2組(情緒学級)は、6年生のY児が1名在籍する学級である。日ごろは学級担任とY児の2人だけで道徳授業を行うため、Y児の集中力が途切れると授業を継続することが難しい実態があった。

くりの実2組の授業サポートとして筆者(大藏)が道徳授業に加わるようになり、3人で活発に自分の意見を表明し共感したり議論したりする授業に変化した。それにより、Y児の道徳授業に対する取り組み方が変わってきた。「大藏先生!今度の道徳もくりの実においでよ」と授業後Y児は声をかけてくれる。

Y児は周りの人と関わることが苦手で、人間関係におけるトラブルが多く、悲しい思いをしたり叱られたりする経験が多い。そこで本時は、人に嫌なことを言われた時の解決方法について考える問題解決型の道徳授業を試みる。できるだけ多くの解決方法を考え、その中から最適な解決方法を選択させることによって、社会性を高めていきたいと考えた。

本時の配慮事項として、Y児が自分の辛い経験を思い出し、解決の糸口を見つけられずに授業が中断してしまうことがないように、ロールプレイの場面の設定を変更したり、解決策は必ず主人公の立場で考えることを担任と確認したりした。

友達に嫌なことを言われたら時の対応についてY児と共に考えたことは、「①だまっている、②がまんする、③無視をする、④席を立ててその場を離れる、⑤言い返す、⑥先生に相談する、⑦友達を叩いたり蹴ったりする」である。

①～⑦の解決法を実行したらどうなるかについて話し合いをしていると、Y児は「こんな問題を考えても、時間の無駄だ」「道徳で話し合うことは実際の生活とは違う!絵空事だ!」と言い始めた。今までの辛い体験を思い出し感情的になり始めたY児に接しながら、この閉塞感を打開していく方法はあるのだろうか和筆者(大藏)は自問を続けていた。しかし、ここを乗り越えなければ次に進むことはできないと確信したため、Y児の気持ちに寄り添いながら一緒に解決策を決めていくことにした。

以下は、学級担任の省察シートである。「強くマイナス思考になり、投げやりになり始めたY児を

見て授業が続けられるのか心配になった。Y児が『無駄だ！絵空事だ！』と言いながらも授業を続けたのは、この活動の大切さを感じていたからだろう。大蔵先生(筆者)は、Y児の辛い経験に共感しながらも、『ぜひここから、今後活かせる解決策を見つけようよ』と、こだわり続けた。このような教師の姿をY児に見せていくことは、対人関係において失敗の多いY児に希望を繋いでいくことになるだろう」。

本時終了後、Y児は非常にすっきりした様子であった。またその後、穏やかに過ごしたと聞く。Y児は「いじわるは、注意をしたってなくなるんだ。我慢するしかないんだ！」と怒り、「でも、我慢していたらいつか爆弾のように破裂しちゃうよ。ずっと我慢するなんてできないよ」と筆者(大蔵)に反論され、Y児は思考し続けた。3人による討論は授業終了のチャイムが鳴るまで続いた。そして、3人にはより良い生き方を模索することに対する大きな充実感が残った。

(5) 考察

発展的授業の提案については、できるだけ多くの実践事例を用意し授業者が実践してみたい資料や教材を選択できるようにしたり、学級の児童の実態にあった教材をこちらから提案したりした。さらに「チェックシート→課題の明確化→授業実践→振り返り」というPDCAサイクルで授業サポートを行い、発展的授業の提案が授業者の次の道徳授業にどのように繋がっていくかについて検証していく必要がある。

多くの教師が抱える悩みである「①授業は流れるが発言が少ない→②授業が盛り上がらない→③発言を整理して板書できない→④話し合いが深まらない→⑤道徳的価値を押し付けている(→①に戻り繰り返す)」という道徳授業のマイナス・スパイラルを打開するために発展的授業を提案することによって、子ども主体の学習活動に変えることができた。今後も授業サポートを進め、さらに指導方法を創意工夫して道徳授業の充実を図っていきたい。

課題としては『問題解決型の道徳授業』で柳沼も指摘するように、授業中子ども達が予想外の発言や本音を偶発的に語りだすこともあるため、授業者は発言を瞬時に分析・判断し問題解決のための支援や助言を行う必要がある⁹⁾。また、多様な考えや本音を引き出すためには教師が常に受容的で公平公正な立場に立ち、問題解決を温かくサポートする等の学級経営の力量も必要となる。これらのことを念頭において授業実践に臨むことも、今後大切にしていかなければならない。

おわりに～各教師の道徳授業力を高めるために～

道徳教育推進教師が各教師の自己課題に応じた授業サポートを行い効果的な校内研修を推進することで、学校の道徳教育全体が活性化され授業のレベルも上がっていくことがアンケートやインタビュー調査から明らかになった。

具体的な成果として一つ目は、授業サポートを受けた児童の道徳授業に対する意欲が向上していることである。二つ目は、授業サポートを受けた教師が自己研修を継続し、授業力が高まっていることである。三つ目は、授業サポートを各教師への支援のみに留めず、研修で広めることで授業力が向上していることである。こうしたサポートの方法と体制をより具体的に明確化し、それを広めることによってさらなる道徳授業の充実を図ることができるだろう。

今後の課題としては、まず、授業サポートを行う中で明らかになった効果的な支援策についてまとめ、どの道徳教育推進教師でも実践できる「授業サポートのモデルプラン」を作成することである。次に、道徳教育推進教師が行う授業サポートや各提案が、教師にどんな影響を与えているか、それによって教師はどんな授業実践を行ったか等について継続的に検討する必要があることである。最後に、研修体制の充実や年間を見通した研修内容について明らかにしていく必要がある。現在のところ各教師一人一人に対して授業サポートを実践している状態であるが、授業力の向上は数回の授業サポート

だけでは十分ではないため、道徳授業の基本的な技法を学びたい教員対象の授業公開や研修会、開発的道徳授業を学びたい教員対象の授業公開や研修会を設定することも有効である。

また、学年会・学年部会など既存の組織を有効に活用しながら、全教師が互いに学び合える研修体制を築くと共に、管理職による指導体制の充実や年間を見通した研修内容について明らかにしていく必要もあるだろう。

(註)

- (1) 大藏純子・柳沼良太「道徳教育推進教師のあり方と開発実践～岐阜県羽島郡の実践を中心に～」、『岐阜大学 教育学部研究報告 教育実践研究』, 15巻, 2013年, 191-203頁。
- (2) 文部科学省『小学校学習指導要領』, 2008年, 93頁参照。
- (3) 永田繁雄・島恒生編著『道徳教育推進教師の役割と実際～心を育てる学校教育の活性化のために～』, 教育出版, 2010年。
- (4) 堀公俊著『問題解決ファシリテーター』, 東洋経済, 2003年。
- (5) 大藏純子・柳沼良太, 前掲書, 202-203頁。
- (6) 池田まき子著『命の教室』岩崎書店, 2009年。
- (7) 『13歳からの道徳教科書』育鵬社, 2012年。
- (8) 諸富祥彦・尾高正浩・土田雄一共著『心のノートとエンカウンターですすめる道徳』, 明治図書, 2004年。
上野一彦・岡田智共著『実践ソーシャルスキルマニュアル』, 明治図書, 2006年。
- (9) 柳沼良太著『問題解決型の道徳授業～プラグマティック・アプローチ』, 明治図書, 2006年, 39～41項。

